

繻の会

vol.16

～^{しごく}極格のモーツァルト～
〈創造する喜び〉

モーツァルト

「弦楽三重奏のための ディベルティメント」

Es-dur KV563 より
第1、2、6楽章

鈴木 まどか 〈ヴァイオリン〉
佐々木 真史 〈ヴィオラ〉
阪田 宏彰 〈チェロ〉

繻の会企画・特別プログラム

モーツァルト

弦楽五重奏曲 第4番

g-moll KV516

さい
絃楽四重奏団

第1ヴァイオリン 鈴木 まどか
第2ヴァイオリン 中島 久美
ヴィオラ 佐々木 真史
チェロ 阪田 宏彰
第2ヴィオラ 小島 茂隆

モーツァルト

「二つのドイツ語教会歌」

KV343
1. 神の小羊
2. エジプトより

大平 康子 〈ソプラノ〉

今 拓野 〈作曲〉

ヴァイオリンとフルートとピアノの為の
三重奏

「落下する花火と 旧バターシー弧線橋」

(J.M. ホイッスラーの作品に寄せて)

鈴木 まどか 〈ヴァイオリン〉
若土 祥子 〈フルート〉
加納 麻衣子 〈ピアノ〉

2012. 9. 21 (金)

MUSICASA

ムジカーザ

開場/18:30 開演/19:00

入場料/前売券 ¥3,000

当日券 ¥3,500

学生券 ¥2,500

(全席自由)

「^{しゅく}桎梏のモーツァルト」～創造する喜び～

今回取り上げる作曲家は、誰もが知っている天才「W.A. モーツァルト」です。

これまで蘭の会では、楽譜から作家の“強い意思”をどこまで読み取れるか、また表現追求出来るかがテーマでした。しかし今回挑戦する「モーツァルト」は、強い意思を持った作曲家というよりは、天賦の才を持った選ばれし者です。

彼の天才的音楽性を表現しようとする時、精神と創造力をもって作り上げていこうとしても上手くいかないのかもしれませんが、よって彼を天才として見るのではなく、同じ人間として淡々と音楽に向き合い、気負わず無心で演奏に関わっていけば、結果として、彼の音楽の本質が、浮き彫りにされるのではないかと……
というのが今回の蘭の会のアプローチです。

モーツァルトは確かに天才と呼ばれる所以があります。
技能的な事ならば（作曲もそうですが、特に演奏家として）、その若さにして考えられない能力を持っていました。
認めざるを得ません。

しかしこと作曲に関しては神ではなく人間……。
確かに書き上げる速さは神業ですが、モーツァルトは自身の言葉で「自分程作曲の勉強をした者はいない」と語っています。
創作物・作品には作り手のすべてが映し出されてしまいます。
逆に彼の周辺、環境、状況、世間の声等を多く学んでしまうと、誤解を招く事も多いかもしれませんが、創作物・楽譜に残された物は嘘を語れません。

楽譜と真摯に向き合う事、誰が書いた物かを意識せずに純粋に読み取る事が、最も正しくモーツァルトを伝えると考えます。

彼の悩み苦しみ、悲しみも喜びも、確かにそこにある筈なのでから……。

『晩年の数ヶ年モーツァルトは、これ以上無い苦しみの中にいた。
生活は困窮し、作品は売れない、子供は生まれるが若死してしまう。
楽譜屋から出版は断られる、オペラの注文は少なく、全く理解されない。
あの“フィガロの結婚”でさえ、「音符が多すぎる」「ごたごたして長たらしい」などと言われた。
しかし彼は書き続けた。なぜこんなに書いたのだろう。
殆ど報酬の当ても無く、何の代償も期待出来ないのに……。』(吉田秀和全集1モーツァルト・ベートーベンより)

それでも偉大な作品群の多くはこの時期に生まれている。
無数のワルツ、メヌエット、レントラー、三つの最後の交響曲第39番、40番、41番（ジュピター）、オペラ“フィガロの結婚”、“ドン・ジョヴァンニ”など。

36年の短い人生の間に600以上の作品を書き上げるという神業は、ミューズの神に愛され続けた証。

まさに音楽の奴隷「^{しゅく}桎梏のモーツァルト」なのである。

惨苦の中に書き続けた作品にはモーツァルトのすべてが刻まれている。大作オペラを書き終えるとよく彼は語った。
「こいつもたいして儲けにはならないんだ。だが僕は気に入っている。それが僕への報酬だ！」

芸術とは、“誰にも理解されない最も苦しい時にこそ、純粋に己と向き合い、何事にも惑わされることなく自分の信じる作品を創造する事が出来る”ものなのである。

芸術の創造は決して損得ではない。

そこには何事にも代え難い「創造する喜び」が、確かに存在するのである。

《今回のテーマについて》

蘭の会代表 今 拓野

MUSICASA

ムジカーザ

所在地 東京都渋谷区西原3-33-1
交通 小田急線・地下鉄千代田線
「代々木上原駅」東口より徒歩3分
主催 蘭の会実行委員会
公演についてのお問い合わせ：
今(こん)拓野 Tel&Fax. 04-2945-2881



チラシデザイン/飯沼 佐和子